

全ての人の幸せを願って



障害があっても共に生きることが出来る町でありたい

一本松交流促進センターで、ありんこくらぶ（会長、宮崎和友さん）による「第11回ありんこくらの催し」が行われ、約300名が参加されました。

催しに先立ち、宮崎会長が「今まで、様々なテーマで催しを開催しましたが、多くの方に参加していただき、本当にありがとうございます。そして、子どもや親自身も、地域の方に支えられ、成長させていただきました。これからも、いつも明るく笑顔で元氣よく活動することが、やさしさを地域へ広げていくものと信じ、活動していきたいと考えています」と開会あいさつを行いました。

開会セレモニーでは、全盲の野中梨那さんが「翼をください」を独唱し、座談会では、ありんこくらぶ会員や支援者等、計8名が登壇して「10年の活動を省みて、またこれからを考える」というテーマで、障害者を取り巻く社会環境等、障害のあるなしに関わらず、一人一人が地域で輝くためには何が必要で大切なかなど、それぞれの立場で熱く語られました。

その中で、知的障害を持つ子どもの保護者から「小さい時から、障害に即した専門的な施設で学ぶことも大切ですが、地域で保育園や小中学校に通うことで、同級生や地域の方がやさしく接してくれた。一本松は、そんな優しい町でした」と話される等、障害のあることを隠さず、積極的に地域との関わりを持つと活動されてきたありんこくらの素晴らしさを話されました。また、聴覚障害のある宮崎希美さんからは「私は、1歳1カ月の時、髄膜炎にかかり、耳が聞こえなくなりましたが、小



命の大切さを語る塩見志満子さん

障害について語る宮崎希美さん

熱唱する野中梨那さん

学校から高校までは聾学校に通うこともなく、一本松で過ごすことができました。当時は、健常者の友達との会話が聞こえず、笑顔で合わすことが多かったのですが、大学では同じ障害を持つ方と出会い、それまでの生活とは違った世界を知り、障害を持ったことの悲しみを共有することができました。また、就職をして健常者の方と働く中で、一本松での貴重な生活体験がいかされている」と力強く話されました。

また、助言者として参加された水野眞喜男さんからは「障害を持つという重い事実に対して、仲間づくりをすることで、楽しいことは倍になるし、辛いことは半分になる。一人で悩み、辛いことを外に出さず閉鎖的になることは、結果として地域社会の心配ごとになる。そんな面でも、ありんこくらぶの活動は、他の模範となる素晴らしいものだと思います。今後とも、皆さんの明るさを、愛南町に、そして、愛媛に広げてください」と、力強い応援の言葉を述べられました。

最後に、西条市で「のらねこ学かん」を開設している塩見志満子さんの「共に生きる」と題した記念講演が行われ、塩見さんは「私は、今治養護学校の教諭時代に出会った不自由な子どもたちとの絆を断ち切れない。そんな思いで、のらねこ学かんを作りました。障害のあるなしに関わらず、人は一人では生きてゆけません。2人の子どもと主人を事故や病気で亡くし、相手を許す大切さを知りました。社会の中でも、許しあえる優しさが溢れることが、ありんこくらぶの願いでもあり、私の願いです」と話されました。

自らの体験を熱く語られる塩見先生の言葉は、聞く人の心に響くもので、改めて命の尊さを考えさせられるお話しでした。